フィールドとの出会い

山内熱人

2005 年の夏、初めてメキシコの地を訪れた私は、自分の研究目的に適したフィールドを探すため、村々をまわっていた。ふさわしいフィールドが見つけられるだろうか、私を受け入れてくれるだろうかという不安を抱えていたが、同時に、好奇心と期待で胸が一杯だった。

ある日、私が地図を片手に調査地の候補となる村を歩いていると、男が声をかけてきた。「お前は中国人か、韓国人か、一体こんなところで何をしているんだ」。私が目的を告げると、彼は、「俺はこの村のことを何でも知っているから案内してやる」、と言って車で村を案内し、彼は私を自分の家に招きいれた。そこには彼だけではなく、息子夫婦や娘夫婦とその子供たちが住んでおり、子供たちは初めて出会った日本人である私に興奮して、庭にある物、家畜、植物を紹介してまわり、自分たちの写真を撮るように言った。

写真１　現地の娯楽の一つに、ハリペオという暴れ牛を乗りこなす様を観客が見る催しがある。この少年はそれを再現しながらポーズをとっている。

その日は娘夫婦の誕生祝があり、自宅の紹介が終わると娘の嫁ぎ先へと連れて行かれた。そんなプライベートな集まりに今日あったばかりの他人が参加していいものかといった遠慮を伝える事もできないまま、その祝いに参加する事になった。彼らのしゃべっている事、私の態度の何を嘲笑しているのか、ちっとも理解できなかった。私は、フィールドに成熟すれば、こういったことも全部分かるようになるのだろうか、と考えていた。

夕方になり、帰ろうとすると、「明日は友達の結婚式があるから、朝の 8 時にまたここに来い」、と誘われた。他の村もまわろうかと考えていたが、いい機会だからと翌日にそれに参加した。そしてそのまま、次は何があるから来い、バッタを食べたことがないなら取って食べさせてやるから来い、などといった誘いに応じていき、その村は私のフィールドとなり、彼らは私の家族同然の存在となった。最初に声をかけてくれた彼はもう亡くなってしまったけれども、彼こそが私をフィールドへいざなった存在であり、感謝しても

しつくせない。

写真３　８月終わりから９月初めの季節になると、しばしばとうもろこし
畑にバッタを取りに行く。水洗いして乾燥させ、不純物を選別後、油で炒
め、塩とレモン、にんにくで味付けする。食感は小エビに似ている。